

〔研究紹介〕

9世紀における武蔵国衙と集落

—器種構成からみた地域性—

人文科学専攻 考古・歴史学コース

修士課程2年 齋藤葵

1. はじめに

古代日本において地方支配の拠点施設として各国に国衙や郡家などの地方官衙が置かれた。武蔵国では多磨郡に国衙が置かれ、それを起点に道路遺構が走るとともに、諸施設が点在し、竪穴建物や掘立柱建物が稠密に広がっている。これまで円面硯や墨書土器などの分布状況から、文書行政の場や工房など国衙を取り巻く空間構成について明らかになってきている（江口 2014）。他方で、竪穴建物跡や井戸跡などの遺構から国衙周辺に集住する人々について検討が進められているが（荒井 1995）、そうした人々が使用していた食器に関する検討は国衙成立期である7世紀末から8世紀代に焦点が当てられてきた（山口 1987）。

そこで、武蔵国衙を中心とした同心円的な範囲を任意で設定し、各範囲における竪穴建物から出土した土器について検討を行う。各地域において、土器の種類、器種、用途別に分別し、破片数の計測からそれらの割合を提示する。加えて各地域同士で比較を行い、器種構成における相違点・類似点を見出したい。相違点からはその地域でしか見られない特色が抽出でき、類似点からは広範囲に及んで見られる傾向を明らかにすることができるのではないかと考える。そうしたことから9世紀において国衙を取り巻く地域の性格を明らかにしたい。

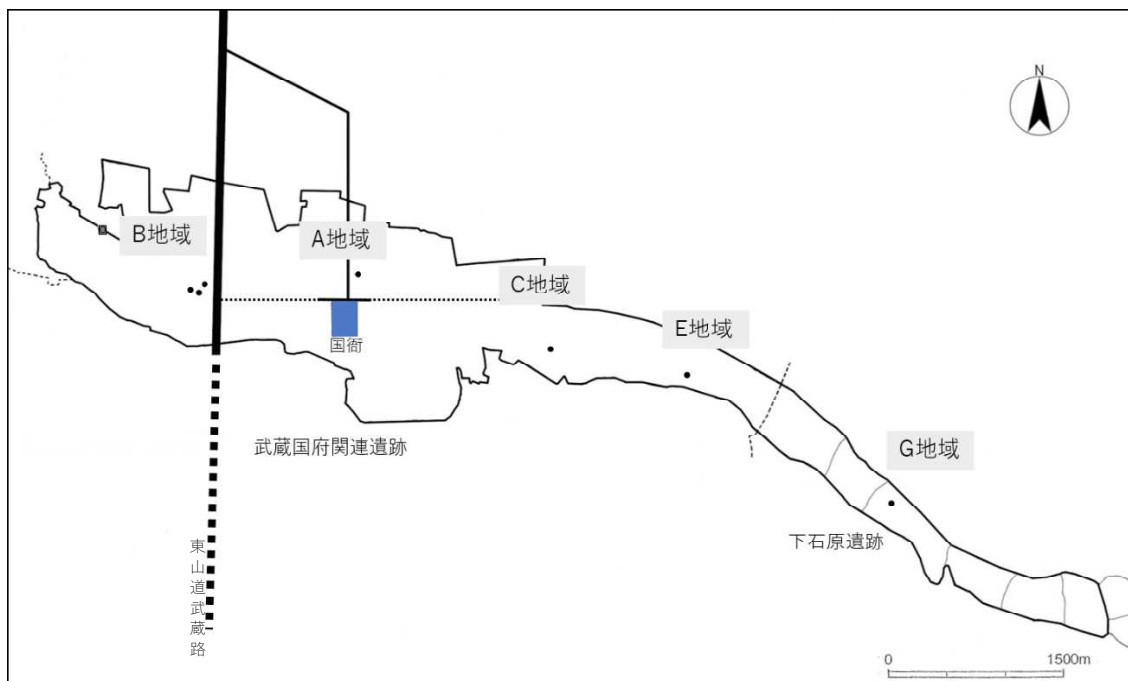
2. 研究方法

国衙を中心に地域（A～G）を設定し、それらに所在する竪穴建物出土土器の器種構成を検討する。国衙から約500m圏内の国衙周辺をA、国衙から約1.5km離れた地域をB・C（Bは西側・Cは東側）、約3km離れた地域をD・E（Dは西側・Eは東側）、約5km以上離れた地域をF・G（Fは西側・Gは東側）とする。対象とする竪穴建物について、9世紀代の建物が1軒以上検出されている調査区内に位置し、削平をあまり受けていない遺存状態が良好な建物を選定する。土器

については、一括資料を対象とした（時期が異なると判断したものは除く）。器種構成を見るにあたり、竪穴建物出土土器の器種を判別して破片数の計測を行い、器種構成比を求める。また用途別・食膳具における土器の種類別・器種別の割合を出し、地域ごとの分析視点に対する状況を把握していく。分析視点については以下に挙げる。

- ・用途別（食膳具・煮沸具・貯蔵具）の割合における多寡
- ・食膳具において、構成される器種数
- ・食膳具における土器の種類別割合の多寡
- ・食膳具において、主体となる器種

以上から分かる地域ごとの状況について比較を行い、器種構成の異同について検討する。



地域設定図 筆者作成

3. 分析結果

A～C・E・G各地域における器種構成について把握し、比較を行って読み取れた傾向に基づき以下に各々の特徴を提示する。

A：食膳具が約8・9割を占め、その器種は8器種から構成されるといった他と比べて、ひときわ目立った状況を見せる。また、土器の種類を見ると土師器・須恵器に施釉陶器が加わることが確認できた。一方で土師器が含まれない場合も存在しており、これに関してはAでしか見られない。

- B：食膳具が約7割を占めており、Aに次ぐ状況を見せる。しかし、食膳具に対し煮沸具が占める割合が大きい事例もあり、2つの状況（Aで見られた食膳具が多くを占める状況とC・E・Gで見られた煮沸具が多くを占める状況）が混在している。このようにBではAとC・E・Gにおける状況が混在していることから、中間的な様相を呈している。
- C：食膳具における器種数が他に比べ最も少ない2器種から構成されるのはCのみである。一方で、用途別割合において煮沸具が約7割ないし8割近くと多くを占める点、食膳具の土器の種類において土師器と須恵器の2種類から構成される点でEと類似していた。
- E：用途別割合や食膳具における土器の種類の分析結果を見ると、Cと類似している。食膳具における器種数についてはCよりも多い数（4器種）が確認され、A・Bと類似する。
- G：煮沸具が多くを占める事例や食膳具における土器の種類について土師器が多くを占める事例、須恵器坏の次に多い器種を見ると土師器坏であるなど、他に比べ土師器が中心となっていた。しかし、食膳具における器種数など他と類似する事例もあった。

4. 考察

以上、器種構成について比較を行ったところ、個々の特徴を見出すことができた。その特徴と遺構の検討をふまえ、各地域の性格について考察した。

まずAでは他に比べると土器の種類と器種において、多種多様な器種から構成されていることが考えられる。また、煮沸具の占める割合が小さいことが確認でき、食膳具の使用が主だったことが考えられる。遺構についてみると国司館と推定される遺構が確認されており、多種多様な器種からなる食膳具は儀式に用いられたのではないかと考える。

つぎにBではAとC・E・Gにおける状況が混在していることから、中間的な様相を呈すことがわかった。BはAの次に国衙に近く、東山道武蔵路などの道路が多くめぐる環境である。Aまでには及ばないが、交通条件の良さから様々な地域の状況が混在していたのではないかと考える。

つづいて、A東側に位置するC・E・Gにおいては煮沸具が占める割合が多く類似した状況を見せるが、なかでもC・Eにおいてよく類似していることがわかった。遺構についてみると、A・Bに比べ竪穴建物が少なく閑散としている。そうした状況が器種構成にも反映したのではないかと考える。

G地においては他と類似する状況もあれば、土師器坏が主体となる場合が確認されるなどGでしか見られない状況も存在した。GはA・B地域に比べ竪穴建物

が少ないが掘立柱建物数棟が確認されており、規模は小さいながらも集落が形成されていたと考えられている（調布市遺跡調査会 2004）。そうしたことから、他地域に比べ最も遠い位置であっても、類似した状況を見せたのではないかと考える。

さいごに今回対象とした地域全体を見てみると、国衙から外方向へ向かって器種構成が変化していく状況と広い範囲で共通する状況とを確認した。また、A 東側においては C・E を空けて G と類似する状況が見られている。これについて G では段丘縁辺部に沿って、西から遺跡が帯状に連なっており、竪穴建物の時期別推移から 7 世紀後半から 8 世紀初頭において急増し、その後激減することが明らかになっている。その背景として、7 世紀代の地域再編成に伴う新規開発のために集められ、その後国府成立期の整備のために人的移動があったと想定されている（比田井 2005）。9 世紀代においても前半に、国府成立期には及ばないが竪穴建物数の増加が見られ、その後減少を見せる。対する国衙と A において、G が小規模化する 9 世紀後半は国衙改修期にあたりとともに、竪穴建物が最も稠密に分布することから国府の第 2 次整備期と考えられている（江口 2014）。以上から 9 世紀でも国府整備に向けた人的移動があったと想定し、器種構成の部分的類似といったように影響したのではないかと考える。

〈引用文献〉

- 荒井健治 1995 「国庁周辺に広がる集落遺構の性格について—武蔵国庁周辺の状況をもって—」
『国立歴史民俗博物館研究報告 第 63 集』国立歴史民俗博物館
- 江口桂 2014 『古代武蔵国府の成立と展開』株式会社 同成社
- 江口桂 2017 「平安時代における国府の変容—武蔵国府を中心に—」
『条里制・古代都市研究 第 32 号』条里制・古代都市研究会
- 調布市遺跡調査会 2004 『調布市埋蔵文化財調査報告 75 下石原遺跡—第 49 地点（店舗建設工事）—』
- 比田井克仁 2005 「南武蔵における律令国家形成期の集落動態—多磨郡と豊島郡の比較から—」
『東京考古 23』東京考古談話会
- 山口辰一 1987 「武蔵国府と奈良時代の土器様相」『東京考古 3』東京考古談話会

〔研究紹介〕

中国人個人観光客の日本における 飲食行動に関する研究

人文科学専攻 地理・地域論コース
修士課程2年 劉 慧 敏

キーワード：訪日中国人観光客、観光行動、食文化、飲食行動

I. はじめに

グローバル化の進展に伴い、世界国際観光の規模が広がっていて、世界的な大交流時代が到来すると言われている。国連世界観光機関（UNWTO）発表の世界観光動向によると、2017年の国際観光客は前年比 8,300 万人増の 13 億 2,200 万人（前年比 6.7%増）となった。世界観光の動向や予測によると、世界にとって観光が経済成長について一層重要な産業となっていくものと期待されている。

一方、ビザの要件緩和や免税範囲の拡大、空港や港湾の整備、LCC やクルーズ船といった交通手段の多様化、訪日プロモーションなどの展開に伴って、ここ数年、日本を訪れる外国人観光客（インバウンド）の数が急増しており、日本政府観光局（JNTO）は 2018 年に日本を訪れた外国人客数は、過去最高の 3,119 万人となったことを発表した。また、訪日外国人の 2018 年間の旅行消費額（速報）は 4.5 兆円と 2011 年（8,135 億円）から、7 年連続で増加したことを発表した。訪日（インバウンド）観光が日本経済を成長させる原動力の一つと言えるだろう。

II. 訪日中国人観光客の動向

日本を訪れる外国人は、アジアからが圧倒的に多い。2003 年にアジアからの比率 67.4%であったが、2017 年にはアジア比率が 86.1%とシェアを拡大している。その中で最も多いのが中国人観光客である。2015 年訪日外国人は 1,974 万人、前年より 47.1% 増加し、過去最高となった。特に中国人観光客の増加率が高く、前年度の 2 倍以上 499 万人となり、台湾と韓国を超えて、1 位になった。中国観光客数が激増して、「爆買い」という新しい言葉とともに中国人観光客が家電や日用品などを大量購入する現象ができた。2016 年からその現象が下火になり、旅行形態が団体旅行から個人旅行へシフトしている現在、モノ消費に加え、コト（体験）消費にも注目が集まっている。中国の経済の急速発展に伴い、大陸の訪日観光リピーターも多くなり、ファッション・食・映画・アニメなどを観光資源

としたニューツーリズムの推進、スポーツや医療のほか、最近では訪日旅行の動機にもなる観光コンテンツである。

Ⅲ. 日本食の魅力

観光庁が行った調査「平成 28 年度訪日外国人の消費動向」によると、「訪日前に期待していたこと」というアンケートに、約 7 割の訪日外国人観光客が「日本食を食べること」と答えた。2013 年、「和食」がユネスコの無形文化遺産に登録され、日本の食文化への関心が高まっている。海外にも多くの日本食レストランが開業しており、訪日旅行者にとって本場で味わう和食は大きな楽しみの一つとなっている。

中国の生活水準の向上に伴い、中国人の食生活が多様化するようになり、各国料理も中国に進出している。日本料理は中国に早く進出した外国料理の一つで、次第に中国人の食生活に浸透し、特に若者の間では人気度が急速に高まっている。ここ数年、中国の大都市では日本食レストランがかなり増えてきている。それに関する統計はないが、中国国内最大級のグルメ情報サイト「大衆点评ネット」の情報を利用して、中国における日本食レストランの現状を垣間見ることができる。中国の検索エンジン最大手の日本法人バイドゥ株式会社は 2017 年の訪日中国人観光客の旅行実態に関するアンケート調査結果を公表した。調査結果によると、彼らの訪日旅行の目的（複数選択可）は「観光名所に行く」が 76%で最多、次に「日本の料理・食事を味わう」（39%）、「買い物」（38%）が続く。

Ⅳ. 研究目的

観光旅行中の飲食は旅行を構成する重要な要素となり、観光の目的の欠かせない部分となってきた。さらに 2013 年、「和食」がユネスコの無形文化遺産に登録されたのをきっかけに、「日本の食文化」について改めて考える機運の盛り上がりを期待できる。

日本政府が中国観光客に対するビザ緩和や、各種の PR 活動に基づき、団体ツアーの観光客に比べ、個人、リピーター観光客がもっと増えるだろう。食を目的とし、飲食には金を惜しまない中国人観光客も増えている。中国人観光客の飲食動向の把握、飲食行動特徴の解明は中国に有効な食のプロモーション活動を行う、中国観光客に日本食の魅力を正確に伝えることにきわめて重要であろう。しかし、訪日中国人観光客に関する研究のほとんどは、観光行動と消費行動を対象とした考察・分析に集中しており、訪日中国人観光客の飲食行動に関する研究はほとんどない。そこで本研究は、文献と各種のメディアや官公庁の調査資料に基づいて訪日中国人観光客の観光行動と飲食動向を把握し、訪日個人旅行の中国人観光客を中心にアンケート調査を行って、その結果を分析して、中国人観光客の飲食

行動の特徴を明らかにする。

V. 調査の概要

今回の調査は2019年7月から9月の間に訪日中国個人観光客を対象として、アンケートに基づく、聞き取りの形式で行った。アンケート調査の場所は中国人の人気観光地東京の銀座駅と新宿駅周辺に設定した。調査票は全部で82部を回収した。今回中国人個人観光客に関するアンケート調査は性別、年齢、居住地など含む13問があつて、加えてアンケート調査項目について補充としての聞き取り調査を行った。

現在、調査データの分析を行っており、10月までに調査データの処理を終える予定である。

[研究紹介]

東洋文学研究紹介

人文科学専攻 文学・文化論コース

修士課程2年 寶 璐

修士課程1年 陳 若曦

(指導 鷺野正明)

文学・文化論演習5（鷺野正明担当）には2名の学生が在籍し、修士論文の題目は以下のようなものである。

寶 璐（修士課程2年） 『浮生六記』研究

陳 若曦（修士課程1年） 『殷芸小説』研究

研究のテーマについてはそれぞれの報告に述べられるであろうから、ここでは研究の方向性を簡単に紹介しておきたい。

寶 璐『浮生六記』研究

『浮生六記』は、清代乾隆年間蘇州の人沈復^{しんぷく}の自叙伝的な小説で、もともと以下のように六巻あったというが、今日では巻一から巻四までの四巻が残り、巻五と巻六の二巻は失われている。

巻一 閨房記楽 巻二 閑情記趣 巻三 坎坷記愁

巻四 浪游記快 巻五 中山記歴 巻六 養生記道

残存する四記四篇はそれぞれテーマ別にほぼ独立した短編で、それでいてそれぞれの篇が緊密に結びつき、立体的な構成となっている。年代順に事跡をのべるのではなく、独立した各篇が緊密に連環する構成は新しい小説方法といえるであろう。これと言った大きな事件はないが、底流に愛妻芸^{うん}を亡くした悲しみがたゆまない、妻とともに過ごした楽しいこと、大家族制における家族との軋轢や悲しみ、そして作者の趣味の世界が淡々と語られる。

寶璐君は現存の四巻を精読したうえで、特に巻二の「閑情」に着目して、作者にとっての「閑情」とは何か、また小説全体における「閑情」の重要性を研究する。

陳若曦『殷芸小説』研究

『殷芸小説』は、『隋書經籍志』で

小説十卷 梁武帝勅安石長史殷芸撰

と記されている。殷芸（いんうん、四七一～五二九）は、字は灌蔬、陳郡長平（河南省）の人で、西中郎豫章長史等を経て、司徒左長史となり、のち東宮学士省に宿した。梁の武帝の勅命によって編まれたこの「小説」は、後世散逸し、明の余嘉錫が輯証してより『古小説鈎沈』『周楞伽輯注本』などによってその全体像がうかがえるようになり、今日では史書等の諸本との校訂も行われている。

陳若曦君は、「小説」というジャンルの変遷（小説はもともと今日言う所の小説ではなかった）のなかで、今日言う所の小説にみられる『殷芸小説』の「虚構」性に着目して、殷芸の時代における「小説」の意義をさぐり、『殷芸小説』の新しさについて研究する。

寶 璐 沈復の『浮生六記』研究—閑情について

沈復の閑情について

01. 幼時の閑情

「閑情」とは『大漢和辞典』には「しづかなところ」とあり、『漢語大詞典』には「心静かな気持ち」とある。しかし、文学作品における「閑情」は辞書の意味では解釈できない。

沈復の『浮生六記』巻二「閑情記趣」に見える「閑情」は、
此皆幼時閑情也。

これらはみな幼い頃の閑情であった。

と言うように、この「幼時の閑情」とは、男児によくある昆虫への好奇心と自然への没入を言うようである。

02. 妻とともに楽しむ閑情生活

「幼時の閑情」と言うからには、大人になってからの「閑情」もあると考えられ、実際に巻二「閑情記趣」には「大人の閑情」が描かれている。私が注目したのは、この「大人の閑情」である。「幼時の閑情」とは違い、興味の対象は花や盆栽、庭石や作庭から、作詩や作画、書道篆刻などにも及び、更には詩趣ある美しい自然のなかで気のあった文人たちとの交流も含まれている。

「大人の閑情」は、一言で言うなら「風流を愛する」ことであるが、またここで注意すべきことは、かつては男が占有していた風流韻事に、女である愛妻芸^{うん}が深く関わっていることである。作者の「大人の閑情」は、この芸に助けられていると思われるところが多々ある。

03. 妻のいない「閑情」

愛妻芸が亡くなったあとはどうであろうか。ここに三つ目の「閑情」が考えられる。それは巻四に見える、かつて男が占有していた、旅と風流である。作者は旅をしながら、風流を探し求めている。

ここでは、一見「男が占有していた風流」のようである。妻との「閑情」が巻一や巻二に描かれたあとでは、妻を失った悲しみを癒すために強いて旅をしているようにも思える。とすると、「閑情」は「妻を失った悲しい情^{しずめ}を閑るのものはなかったのか。

陶淵明は、「性本愛丘山」と言い、恋心^{しずめ}を閑る「閑情の賦」を書いている。沈復も、知らず知らず陶淵明に倣っていたのではないか。それは、陶淵明とは全く反対の、妻を懐かしむための「閑情」ではあるが。

本研究では、以上の三つの「閑情」を考え、沈復の妻への愛情の深さを探ってみたい。

陳 若曦 『殷芸小説』研究—小説としての虚構創作意識

01. 小説の由来と発展について

中国文学における小説の起源は、三つの方面から由来したとされる。それは神話伝説、寓言と史伝である。いずれも戦国時代に形成された。「小説」という言葉は、最初に『莊子』の「外物篇」に見られる。

飾小説以干鼎令，其于大達亦遠矣。

この「小説」とは「つまらない説」という意味で、明らかに現代の小説の意味と異なる。

それでは、「小説」の意味はいつから変わったのか。時代を区切って見れば、『漢書』で小説が「市街のうわさ」と述べているが、定義は明確ではなかった。『隋書』では具体的な小説の名前を30冊列挙した。また、『新唐書』に至って、編集者は以前のいくつか歴史書や雑家類などの書目を移し、伝奇小説に分類した。その為、『新唐書』における「小説」は現代の「小説」とほぼ一致していること

がわかる。故に、「小説」概念の変化原因を分析しようとする、魏晋南北朝に目を向けなければならない。

02. 殷芸小説について

魏晋南北朝の『殷芸小説』は初めて「小説」と名付けられた書物であり、作者は殷芸である。梁の武帝が正史の編集を勅命し、採用しなかった噂や伝説などが殷芸によって収録された。したがって、『殷芸小説』は殷芸の創作ではなく、書物から集録したものである。

魏晋南北朝には、多くの小説作家が現れてきた。しかし、彼らはありのままを記録し、見聞や逸話を本にまとめた。そこには虚構の要素が含まれているが、「虚構化の意識」を持たなかった。例えば、『搜神記』では「發明神道之不誣」と言っているが、作者干宝は虚構創作意識を持っていないで、妖怪が客観的に存在することを証明しようとしている。

ところが、『殷芸小説』では意識的に虚構化したことが窺える。『愚人治傴』という例を挙げておく。

譬如有人，卒患脊癆，請醫聞治。醫以酥塗，上下著板，用力痛压，不覺雙目一時並出。《百喻經》卷三

平原人有善治傴者，自雲：“不善，人百一人耳。”八尺，直度六尺，乃厚貨求治。曰：“君且伏。”欲上背踏之。傴者曰：“將殺我！”曰：“趣令君直，焉知死事？”《殷芸小説》卷五

梁の武帝は殷芸に正史で採用しない事柄を編纂するよう命じたが、殷芸は全てそのまま記録するのではなく、選択しかつ改造を加え、興味を引くように編纂した。

読者に楽しみを与えるために、初めて虚構化した点について、改めて研究する価値があると思う。

〔研究紹介〕

良寛の漢詩研究

——夜半の詩作を中心として——

人文科学専攻 文学・文化論コース

修士課程2年 川崎美香

修士論文では、江戸時代後期に活躍した禅僧良寛（1758～1831）の夜半をテーマとした漢詩について考察を試みたいと考えている。

良寛は、子どもたちと手まりをついて遊んだことや、貧しいながらも自由気ままに生きたお坊さんというイメージが強い。良寛の漢詩については、定型・押韻は守っているものの、平仄に関しては無頓着であることが指摘されている。当時の日本の漢詩は定型・押韻・平仄を逸脱することを避ける傾向にあったが、良寛は詩の形式よりも〔心中の物を写す〕を重視しており、心に生じた素直な思いを表現するのが自分の詩だと述べている。また中国の詩との関わりを考察した研究もある。しかし、良寛の漢詩の技巧や題材、典故などではなく、良寛がどのような時に漢詩を詠んでいるのか、ということに注目してみた場合、夜半に作詩していることが多いといえる。旅先にあつて詠んだ詩、日常のことを詠んだ詩、僧としての境地を詠んだ詩、あるいは風景や事物に感動して詠んだ詩などのなかで、夜半に詠んだ詩は、良寛の漢詩作品全179首のうち49首にのぼる。単に作品数が多いだけでなく、良寛自身も夜に漢詩を詠むことを自覚的に述べている。たとえば、「清夜 寐ぬる能はず／反側して〔寝返りをうって〕 斯の詩を歌ふ」（「唱導詞」）、「錫〔錫杖〕に倚つて清夜に吟じ／蓆を鋪きて月裡に睡る」（無題）と、眠ることのできない夜に詩を詠むことや、清らかに晴れた夜には詩歌を口ずさみながら眠りにつくことを述べている。また中国の漢詩においても、夜半に好んで詩作することが多く、先行研究でも夜の詩作に注目したものがある。

良寛は自覚的に夜半に漢詩を詠んでおり、現在把握している傾向として二例挙げたい。

一首目は、良寛が越後へ帰郷する際に詠んだ作品である。

伊勢道中苦雨作二首 其二	伊勢道中苦雨の作二首 其二	良寛
投宿破院下	投宿す 破院の下	
孤燈思凄然	孤灯 思ひ凄然たり	
旅服孰為乾	旅服 孰か乾くことを為さん	
吟咏聊自寛	吟咏して 聊か自ら寛くす	
雨声長在耳	雨声 長く耳に在り	
欹枕到暁天	枕を 欹てて 暁天に到る	

第四句の「聊か自ら寛くす」というのは、多くの詩詞に見られる表現。たとえば、三国魏・曹丕「燕歌行二首」其二に「詩を展べ清歌し 聊か自ら寛くし／楽しみ行き哀しみ来りて肺肝を摧く」とあり、また唐・王昌齡「扶風〔地名〕の主人に代はりて答ふ」詩に「依然として扶風に宿し／沽酒〔酒を買ってきて〕 聊か自ら寛くす」とある。いずれも気分が塞ぎ、不安感におおわれるなか、せめて詩歌や酒によって気を紛らわせようとすることを歌う。良寛も伝統的な詩句を用い、不安な夜を過ごすなか、吟詠によって気を紛らわせようとしていることを表明し、深い悲しみを詠んでいる。

また、良寛が五合庵在住時代に詠んだ次のような詩もある。

無題詩	無題詩	良寛
誰問迷悟跡	誰か問はん	迷悟の跡
何知名利塵	何ぞ知らん	名利の塵
夜雨草庵裡	夜雨 草庵の裡	
双脚等閑伸	双脚 等閑に伸ばす	

第三句の「夜雨 草庵の裡」という一句は、白居易の「廬山草堂夜雨独り宿す」（七言律詩）の詩句をふまえており、全体的に白居易の詩趣が表現されている。白居易の詩趣をふまえる良寛も迷いと悟り・名声と利益がいかほどのものかと疑義を呈する。「双脚 等閑に伸ばす」の句は、そのような捕らわれとは無縁な心境となっていること、だからこそそのびのびと眠れる清々しい心境を詩に詠んだのであろう。

以上のことから、良寛が夜半に作詩をするときの心境としては、大きく二つの傾向が見受けられる。一つは眠ることのできない夜、不安感に襲われた時、それをまぎらわせるかのよう漢詩を詠むのである。意図的に夜半に作詩するのではなく、私たちが眠れないときに本を読んだりするような感覚で詩を詠んでいるのだと考えられる。そのため夜半に詠んだ詩には、孤独感や深い悲しみを表現した詩が多い。昼間は友人や子どもたちと楽しく戯れている良寛かもしれないが、夜には不安を感じることもあり、その自分の気持ちを素直に吐露したものである。

一方、夜半の作詩がすべて孤独や悲しみ、不安を詠んだだけでもない。比率としては少ないが、時として世俗の価値観を超越した、満ち足りた心境を詠むこともある。これらはいずれも、良寛が自分自身と向き合うことによって抱いた感覚であり、良寛にとって夜は自分を見つめ直す特別な時間であったと想像させられる。

〈参考文献〉

- ・谷川敏郎『校注 良寛全詩集』（春秋社 2014年）
- ・内山知也『良寛詩 草堂集貫華』（春秋社 1994年）
- ・中野孝次『風の良寛』（文春文庫 2004年）

- ・中野東禪『良寛詩歌集』（NHK出版 2015年）
- ・井本農一『良寛』（上下）（講談社学術文庫 1978年）
- ・内山知也・谷川敏郎・松本市壽編『定本 良寛全集』（中央公論社 2006年）
- ・宇野直人『知っておきたい日本の漢詩—偉人たちの詩と心』（勉誠出版 2018年）
- ・宇野直人『中国古典詩歌の手法と言語——柳永を中心として——』（研文出版 1991年）
- ・上芝令子「良寛詩の特質～「竹」素材についての一考察～」『日本研究』11号 1997年
- ・上芝令子「良寛詩にみられる白居易詩受容について」『日本研究』18号 2005年
- ・下田祐輔「良寛自選集『草堂詩集』の構造」『国文学攷』141号 1994年
- ・下田祐輔「良寛自筆詩集における編集意識——『草堂詩集』を中心に」広島大学文学部紀要 53号 1993年

〔研究紹介〕

『史記』研究

——黄老思想の位置づけ

人文科学専攻 文学・文化論コース

修士課程2年 松本大智

中国最初の歴史書に位置づけられる『史記』の著者司馬遷の研究に取り組んでいる。司馬遷は、父司馬談の意思を受け継いで、宮刑を受けながらも『史記』を完成したことで知られる。そのため、父司馬談の影響がどのように司馬遷に及んでいるのかということが問題とされてきた。従来の研究でも指摘されていたことであるが、司馬談が支持していた黄老思想が、司馬遷にも影響を与えている。

修士論文では、父司馬談と司馬遷が考える黄老思想がどのようなものであったか、また司馬遷の『史記』に黄老思想がどのような影響を与えているかということを中心に具体的に検討していきたい。現時点では、司馬談・司馬遷父子の時代にどのような考え方があったのかを把握するため、春秋戦国時代から前漢中期までの思想状況を整理した。

漢代の思想の状況

『孟子』によれば、孟子の時代、思想界では墨家と楊朱が天下を二分するほどの勢力だったという。墨家は義を貴び、兼愛・非攻などを唱えながら、社会の規範というものを重視した思想家である。楊朱は、統治者の都合により戦争に巻き込まれたり、政治によって二転三転と決まりが変わることに疲れた人々が、他者に一切頼らずに、自分たちの力だけで生きていくことを提唱したものである。しかし、戦国の乱世を統一したのは、法家思想を採用した秦の始皇帝であった。厳格な法を運用させることによって、富国強兵を実現し、他の国々を統合し、さらに長さや重さの基準を設けるため度量衡を統一し、学問を統制するため焚書坑儒を行った。秦が滅亡し、楚漢（項羽と劉邦）の戦乱を経て漢が建国されると、それまでの秦の法家思想に代わり、黄老思想が政治の中心的思想になった。前漢初期、政治理念として曹参、陳平、文帝などが尊重したのは黄老思想であると考えられている。戦乱によって疲弊した人々にとっては、何よりも休養が必要であったと言える。その後、漢王朝も百年を経過する頃には徐々に儒家思想に移り変わっていく。司馬遷はまさに黄老思想から儒家思想に移り変わる時期にあたってお

り、『史記』にも黄老思想の影響が色濃く表れている。

黄老思想

漢代の黄老思想を検討する資料に『黄帝四経』がある。1973年に発掘され、世に知られるようになった書である。第一章の道法では、道と法の治国に対する重要な意義を認識すること、国家を治めるには法政によらなければならないことが論述され、黄老思想が老子の学と異なる特徴を示す書であるとされる。また、法についても、秦の始皇帝のような厳格な法の運用ではなく、民などに対する優しさも見受けられる法を重視している。

まとめ

現段階で把握している限りでは、司馬談の黄老思想は、道法折衷の思想であり、君主のあり方（虚無・因循）、統治方法（形名参同の術）に加え養成思想を説いたものであり、一方の司馬遷の黄老思想は、父司馬談の黄老思想を踏まえながら、新たに核として「老荘」を提示したものだと考えられる。これらの司馬遷の思想が、『史記』の列伝などから見られるのではないかと考え、今後検討していく。

〈参考文献〉

- ・ 司馬遷『史記』（全10冊）中華書局 1997年
- ・ 武田泰淳『司馬遷—史記の世界』講談社 1997年
- ・ 宮崎市定『史記を語る』岩波書店 1979年
- ・ 渡邊義浩『漢帝国—四〇〇年の興亡』中央公論新社 2019年
- ・ 浅野裕一『黄老道の成立と展開』創文社 1992年
- ・ 池田知久『老荘思想』財団法人放送大学教育振興会 1996年
- ・ 楠山春樹『老子の人と思想』汲古書院 2002年
- ・ 木村英一『老子の新研究』創文社 1959年
- ・ 澤田多喜男 訳『黄帝四経』知泉書館 2006年
- ・ 嘉瀬達男「諸子としての『史記』——『漢書』成立までの『史記』評価と撰述状況の検討」『立命館文学』598 2007年
- ・ 浅野裕一「秦の始皇帝と漢の皇帝観——「秦漢帝国論」批判」『島根大学教育学部紀要人文・社会科学』5 1984年
- ・ 浅野裕一「黄老道の政治思想——法術思想との対比——」『日本中国学会報』第36集 1984年

〔研究紹介〕

中国における保健体育教員養成課程の考え方の変遷

教育学専攻

修士課程1年 張潮宇

1. はじめに

1990年代から、中国の学校教育は、受験を重視した「応試教育」（原語）から生徒の発展を目的とする「素質教育」（原語）に転換してきた。この教育の方針転換によって、教員の質および教師教育に新たな要求が出され、それに伴って教員養成の改革も進められてきた。

では具体的に、どのような方針の転換と新たな方向性が示されたのだろうか。ここでは、中国における教育の考え方及びそれに伴う教員養成制度の変遷について整理する。

2. 「応試教育」と「素質教育」

「応試教育」とは、日本の詰め込み教育とよく似ている教育のスタイルである。中国の応試教育は、元ソビエトの有名な教育者イ・アン・ケロフによって開発されたもので、いわゆる教え込み、創造性がない、勉強の内容は教科書に限るといったことを特徴としていた。当時の中国はこの考え方を取り込み、結果として学生に知識を植え付け、文章の意味の理解よりも暗記が重視されることとなった。

その後、「中国共産党中央国務院教育改革の深化と全面的な素質教育の促進に関する決定」（1999）によって、「素質教育」が目指されることになった。素質教育とは、人々の基本的な素質を総合的に改善することを目的とし、人間の主観性とイニシアチブを尊重し、人間の性格に基づいて、教育の基本的特徴として人々の健全な人格の形成に焦点を当て、人々の知的潜在能力の開発に焦点を当てた考え方である。素質教育は、社会の発展に必要なもの、教育が置かれている社会環境のあらゆるものや現象に正しく向き合い、対処できる人材の育成を目指すこととなった。

「国家による中長期の教育改革と発展の綱要（2010-2020年）」は、21世紀に入ってから発表された中国初の教育計画である。今後の国家教育改革と発展を導く重要なプログラムの主な内容として、以下の十個の条件で構成されている；

- 一、素質教育改革の促進
- 二、義務教育の均衡発展の改革

- 三、職業教育パターンの改革
- 四、生涯教育制度の仕組みの構築
- 五、一流のイノベーション人材育成の改革
- 六、受験制度の改革
- 七、現代の大学制度の改革
- 八、学校制度の改革の深化
- 九、地方教育投資保証制度の改革
- 十、省級政府教育の全体計画の改革

3. 教員養成制度の考え方の変容

このように教育の考え方が移り変わる中で、より良質な授業を行うことのできる教員が必要とされるようになった。では具体的に、どのような教員養成制度の変容が見られたのだろうか。

現在、中国における教員養成は、師範系の大学や体育大学、総合大学で行われている。「国家による中長期の教育改革と発展の綱要（2010-2020年）」（教育部、2010）によると、その教員養成課程の中で、「実習制度」をつくり出す必要があることが指摘されている。特に実践科目の教育実習は、良質な授業実践を行う教師を養成する上で、非常に重要な役割を演じるものと位置づけられている。あわせて実習指導教員をどのように育成するのかといった問題も「教育実習制度」における重要な部分の一つとなっている。また、2011年10月に「教師教育課程標準（試行）」（原語。以下「課程標準」とする）が公布された。この課程標準は、教師教育機関が教師教育課程開設を行う際の国からの基本的な要請を表すものであり、教師教育課程の作成、教材の開発、教育の展開と評価、教師の資格認定を行うときの重要な根拠となるものである。ここでは当然ながら、教育実習が重要視されるようになっており、各大学において、望ましい教育実習の在り方について検討が進められている。

4. まとめ～今後に向けて

このように、中国の教員養成は変革の時を迎えている。しかし、各大学で具体的にどのような取り組みや成果が得られているのかについては、まだまだ研究を進める余地があると考えられる。日本では、林（2012）が、中国の49の大学と日本の53の大学を調査対象として中学校体育教員養成カリキュラムについての比較研究を行っているし、日野（2002）は、教育実習は授業実践や子どもの関わりを通して実習生の「教授技術」を向上させるという重要な役割を果たすと指摘している。しかし、中国の教員養成を対象にした場合、カリキュラムにおける非常

に重要な部分である教育実習の検討は十分ではないと考えられる。また、先行研究では全般的に小中学校の教師教育のカリキュラムに対して行われており、体育科目の教育実習に関する研究はまた非常に少ないという現状もある。

今後は、「課程標準」を実施した後、体育科の教員実習の実態はどのように行われるのかを調査するとともに、実習の前後で、実習生の授業観がどのように変容したのかについてインタビュー等の方法を用いて分析し、中国の教員養成、教育実習をより充実・発展させていくための方策について検討していきたいと考えている。

<参考文献>

- ・岩田昌太郎ほか（2006）「教育実習における指導内容に関する事例研究—実習日誌とインタビューを手がかりに—」『体育科教育学研究』22（2）pp.1-10
- ・嘉数健悟・岩田昌太郎（2013）「教員養成段階における体育授業観の変容に関する研究」『体育科教育学研究』29（1）pp.35-47
- ・日野克博（2000）「教育実習生の教授技術に関する事例的研究—特に「授業場面」と「教師の相互作用」に着目して—」『愛媛大学教育学部保健体育紀要』第3号 pp.31-38
- ・高慧珠（2016）「教師教育課程標準（試行）」公布以後の中国の大学の小学校教員養成カリキュラム」『中国四国教育学会教育研究ジャーナル』第18号 pp.31-40
- ・教育部（2010）「国家による中長期の教育改革と発展の綱要（2010-2020年）」<http://old.moe.gov.cn//publicfiles/business/htmlfiles/moe/info_list/201407/xxgk_171904.html> 2018年6月1日アクセス
- ・林楠（2012）「中国と日本の中学校体育教員養成カリキュラムに関する比較研究」『スポーツ研究』Vol.31,No.1,pp.13-28
- ・林楠・木原成一郎・岩田昌太郎（2012）「中国の体育教員養成カリキュラムにおける教育実習に関する事例研究」『体育科教育研究』28（1）pp.1-10
- ・「中国共産党中央国務院教育改革の深化と全面的な素質教育の促進に関する決定」（1999）
< <http://www.chce.org.cn/Lorder.asp> >
- ・「教育部推進教師教育課程改革に関する意見」教師「2011」6号
< http://old.moe.gov.cn//publicfiles/business/htmlfiles/moe/s6342/201110/xxgk_125722.html >

〔研究紹介〕

深い学びを目指す数学教育

—小・中での対称の扱いを中心に—

教育学専攻

修士課程 1年 張 思 瑶

現在、日本の 2017 年告示の学習指導要領などで「深い学び」が提起されるようになった。「深い学び」とは、ともすれば「ごまかし勉強」とも評される昨今の暗記主義の学習とは対照をなす概念である。日本の戦後教育史での経緯や、人工知能での deep learning との関係。また、G. Polya の「発見的解き方」を読み進めながら、「深い学び」のために、どのような教育・学習が望まれるのかについて考察している。

2019 年 6 月の日本カリキュラム学会で「図形の学年配当—東アジアの教育課程の比較—」（正田教授との共同発表）として、口頭発表を行った。日・中・韓・台の教科書の目次を比較した。この 4 つのカリキュラムは、子どもの発達支援のための図形教育を行う点に関しては共通点があるが、線対称を扱う学年に関して相違を見出すことができた。この発表は加筆・修正のうえ、『初等教育論集』へ正田教授との共著として投稿する予定である。

韓国では、小学校 3 年で図形の変換を、中国では、小学校 2 年で図形を書いた紙を重ねて切る活動を通じて対称に関する素地的な指導を行っている。こうした活動を行うための教材開発を行い、試行的な実践を行うことを今後の予定としている。正田（2010）にみられるように、対称を扱うことによって、四角形の分類などでより洗練された扱いが可能となる。こうしたこれまでと異なる対称の扱いによって、子どもに「深い学び」を提供するための提案をしたいと考えている。

〈参考文献〉

- G. Polya (1962) (柴垣和三夫他訳、1967) 『数学の問題の発見的解き方』みすず書房
正田 良 (2010) 「四角形の分類による現代的な論証学習」青山学院大学教育学会紀要『教育研究』、第 54 号、pp.119-129

〔研究紹介〕

教育学系大学院留学生における 修士論文作成デザインの端緒

—構想の進展とテーマの発見—

教育学専攻

指導教員 助川晃洋

修士課程1年 王 頤

修士課程1年 陸 希

修士課程1年 烏達巴拉

2019年1月に独立行政法人日本学生支援機構が公表した「平成30年度外国人留学生在籍状況調査結果」によれば、日本の大学院に進学する外国人留学生の数は、1983年度の3905人から始まって、以後着実に増加している。より正確に言えば、2011年度に39749人を記録し、当時としてのピークを迎え、2012年度、2013年度だけは、続けてわずかに減少したものの（39641人、39567人）、2014年度は、原状回復のラインを超えて、39979人にまで達している。2015年度に、はじめて4万人を突破してからは（41396人）、2016年度は43478人、2017年度は46373人と上向きに推移し、2018年度には、ついに5万人の大台に乗り、50184人で過去最高を更新している。大学（学部）や短大、高専などに入るケースも含めて、地域・国別では、アジア（279250人、93.4%）、特に中国（114950人、38.4%）の出身者が圧倒的に多く、専攻分野別では、人文科学が1位（140200人、46.9%）、社会科学が2位（74037人、24.8%）となっている⁽¹⁾。大学院だけを見ても、状況は変わらないものと推測される。

一方、「日本人学生の大学院進学者数は横ばい状態が続き、今後も大幅な増加は予想しづらい」⁽²⁾と考えられている。文系と理系とでは事情が異なるにせよ、少なくとも人文・社会科学に限れば、この指摘は完全に正しい。教育学志願者もまた、基幹大学でさえ、慢性的に少ない。

同様の傾向は、本学大学院人文科学研究科教育学専攻修士課程でも顕著に現れており、その結果、助川が主宰する教育方法学研究室では、2019年度の新メンバーとして、3人の留学生（いずれも女性）を迎えた。日本人はいない。

王頤（オウテキ）：中国湖北省出身、湖北第二師範学院卒。

陸希（リクキ）：中国浙江省出身、南昌工程学院卒。

烏達巴拉（オダバラ）：中国内モンゴル出身、内モンゴル民族大学卒。

そして春期のゼミ「教育学演習5（教育方法学）I」では、修士論文の作成に向けた最初のステップとして、それぞれが入試・出願の際に提出した研究計画書において設定していた問題を学術的なコンテキストの中で改めてとらえ直し、さらに独自の、追究に値する課題へとブラッシュアップする研鑽作業に主眼を置いた⁽³⁾。その成果—あくまでも1年次前半終了時点での達成であり、暫定的なもの—は、以下に列挙する通りである。なお与えられた紙幅その他の制約が不可避であるため、言葉が足らず、意を尽くさない論述に終わっている感は否めない。あらかじめご容赦願いたい。

（助川晃洋）

* * * * *

○ 王頤の場合

保護者による子どもの環境移行支援に関する調査

—幼稚園と小学校の接続期の充実に向けて—

日本では、小学校入学直後の児童が学校生活に適應できない事態が、様々な形で生じていると指摘されて久しい。例えば着席してられない、集団行動がとれない、先生の指示に従わない、教室のあちこちでトラブルが起きる、授業が成立しないという困った状況は、「小1プロブレム」と総称されている。その解決に向けた方策としては、幼小連携の取り組みが推奨されており、いまでは当たり前のように行われている。中国の場合も同様である。しかし両国での先行研究は、学校・教員間の交流・協力のあり方ばかりを論じており、家庭・保護者（主に母親）の存在をほとんど視野に入れていないという点で、ともに不十分であると言わざるを得ない。

そこで私の修士論文では、中国の家庭教育実践事例を取り上げて（日本のケースは、あえて考察の埒外とする）、幼稚園から小学校への移行段階にある子どもに対する保護者の理解とはたらきかけの現状と課題を把握することをめざす。2019年11月には、湖北省襄陽市内の公立小学校に通う1年生の子どもへの保護者に対してインタビューを実施することが決まっており、その後も、新たな協力者を確保し、必要に応じて質問紙法（アンケート）などを併用しつつ、「生の声」

をできるだけ数多く集め、精細な検討を加えるつもりである。このようにして得られる結論と従来の知見を統合することによって、幼稚園－小学校－家庭、幼・小教員－保護者の三者による包括的かつ創造的な生徒指導モデルを開発・提案することが可能になるのではなかろうか⁽⁴⁾。

- ・小泉令三『小・中学校での環境移行事態における児童・生徒の適応過程－中学校入学・転校を中心として－』風間書房、1997年
- ・横井紘子「幼小連携における『接続期』の創造と展開」『お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要』第4号、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター、2007年2月、pp.45-52.
- ・田宮縁、池田優、鈴木富美子「保育者の語りにもみる幼稚園における保護者支援：幼小連携に関する語りの分析」『静岡大学教育実践総合センター紀要』No.22、静岡大学教育学部附属教育実践総合センター、2014年3月、pp.53-62.
- ・椋田善之「幼稚園から小学校の移行期における保護者の子どもへの期待と不安の変容過程－入学前と入学後の保護者へのインタビューを通して－」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第53巻、東京大学大学院教育学研究科、2014年3月、pp.233-246.
- ・一前春子『保幼小連携体制の形成過程』風間書房、2017年

○ 陸希の場合

中学生の勉強法の変遷に関する一考察

－家庭学習の他律化に焦点を当てて－

日本では、「教育ママ」という言葉が登場した1960年前後から、家庭教育は、家族が独自に行う教育とは違い、学校教育の下請け的な性格を持つものとみなされるようになった。また2000年のPISA調査開始以降、子どもの学力低下が社会問題となり、学校が出す宿題の頻度と量が増加するなど、家庭学習の充実がめざされた。こうした位置づけと方針は、現在に引き継がれている。

しかし家庭での子どもの勉強に関する先行研究は、突出したエピソードを紹介することや、マクロな統計データを列挙することにとどまっていて、リアリティに迫ることができていない。そこで修士論文において私は、中学生の勉強の有り様を経年的にとらえることにチャレンジしたい。中学生だけを取り上げるのは、彼／彼女らこそが、高校受験・入試という全員参加の学歴獲得競争の渦中において、勉強から逃げるができない（少なくとも小学生や高校生よりは、ずっと

できにくい)状況に置かれていることによる。そして具体的な研究課題としては、次の三つの問いを想定しているが、扱う時代と、その都度の象徴的な方法は、それぞれで異なっている。

1. 1970年代から1990年代にかけて、教科書に加えて、市販の参考書や問題集を活用した定期(中間・期末)テスト対策が、どのように行われていたのか。
2. 1990年代以後、特にゼロ年代頃から、学習塾(補習塾や進学塾など)への通塾率が高まるにつれて、どのような影響が見られるようになったのか。
3. 最近になって、陸続と刊行されている勉強マニュアル本(現役東大生が書いた指南書など)が、特に効率性の観点から、こういったやり方を薦めているのか。

これらに対して順次回答していくなれば、その結果、過去約50年間にわたる関係の動向について、一つの歴史的な説明を提示することができるはずである。

- ・新井郁男編著『学校と塾や地域との間 子どもはどこで学ぶか』ぎょうせい、1990年
- ・中内敏夫『家族の人づくりー18～20世紀日本』藤原書店、2001年
- ・藤澤伸介『ごまかし勉強(上・学力低下を助長するシステム、下・ほんものの学力を求めて)』新曜社、2002年
- ・清水章弘『中学生からの勉強のやり方(新学習指導要領対応・改訂版)』ディスカヴァー・トゥエンティワン、2019年
- ・溝脇克弥「学習塾研究の課題と展望ー学習塾の普及は学校教育に何をもたらしたかー」『教育論叢』第62号、名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻、2019年3月、pp.67-74.

○ 烏達巴拉の場合

在日モンゴル人小学生のアイデンティティ形成支援に関する実証的研究 ー学校外における母国語習得と文化伝承の機会に着目してー

現在日本には、約2万人のモンゴル人が在留している。近年モンゴルでは、経済成長が進んでいるものの、その大部分は、鉱物資源の価格上昇に依存しており、職業選択の幅は狭く、大学を卒業しても就職先は決して多くない。そのため、同じく東アジアに位置し、経済的に発展している一方で、労働力不足が切実であり、高い給料が見込まれる日本をめざす若者が増加することになる。モンゴル語と日

本語の文法が似ていることもまた、モンゴル人にとっては好都合である。

そして来日したモンゴル人同士で結婚し、所帯を持ち、子どもを生み、育て、地域の学校に通わせるというケース（類例を含む）が、すでに数多く見られる。このとき問題であるのは、帰国後のモンゴル社会へのスムーズな適応に向けて、日本だけしか知らない子どもたちに、日本に滞在しているうちに、モンゴルの言葉や文化どのようにして身につけさせるか、さらに進んで「私はモンゴル人である」という自己意識をどのようにして作り出すか、ということだ。しかしその機会は、正規の学校教育の一環ではあり得ず、また家庭に任せるには限界があるため、それら以外の場所で、モンゴル人コミュニティの自助努力によって開設するしかない。私の研究上の関心は、専らその現場に向けられている。修士論文では、在日モンゴル人小学生を対象に、モンゴル人としてのアイデンティティ形成をサポートする取り組みの実態について、東京都内を中心に、首都圏各地で、モンゴル人有志（特定、或いは複数の個人やグループ、団体）によって運営されているモンゴル語教室とモンゴル文化サークルの協力を得て、訪問・観察を繰り返すとともに、指導者や保護者、子どもへのヒアリングを行うことで、事例的に解明したい。

- ・ 関口知子『在日日系ブラジル人の子どもたち 異文化間に育つ子どものアイデンティティ形成』明石書店、2003年
- ・ トクタホ「少数民族留学生の民族的アイデンティティの変容と教育ー中国国籍モンゴル人留学生への調査を通してー」『日本学習社会学会年報』第3号、日本学習社会学会、2007年9月、pp.58-67.
- ・ 套図格「少数民族留学生の異文化接触と民族的アイデンティティー中国籍モンゴル人留学生の事例を中心にー」『東アジア社会教育研究』第23号、東京・沖縄・東アジア社会教育研究会、2018年9月、pp.146-158.
- ・ 室橋裕和『日本の異国 在日外国人の知られざる日常』晶文社、2019年
- ・ オユナー・ノミン「外国人妻のナラティブに見るアイデンティティの揺れー在日モンゴル人女性を事例にー」『大阪大学言語文化学』Vol.28、大阪大学言語文化学会、2019年3月、pp.43-56.

（王頤・陸希・烏達巴拉・助川晃洋⁽⁵⁾）

* * * * *

以上のいずれについても、本人が「やりたいこと」であると同時に、マスターコースの2年間で「できること」の範囲内に収まっており、また質的な水準を満たしていると思われる。そして秋期（以降）には、それぞれが、関連の文献・資

料を入念に読み込み（それ以前に「自分自身の読書法を見出すためには先ず多く読まねばならぬ」⁽⁶⁾）、データを収集・分析し、とにかく文章を書くことで⁽⁷⁾、本格的にオリジナリティを追求・主張していく（いわゆる「研究を通じての教育」⁽⁸⁾は、よほどのエリート相手でもなければ成立しないとする見方は、一面的に過ぎるであろう）。その過程では、指導教員や同期の仲間との建設的な対話や相互批判が不可欠である。

主に大正から戦前にかけて活躍した教育学者の篠原助市は、東北帝国大学法文学部で教授を務めていた昭和のはじめ（おそらく 1927 年）、博士論文の執筆を開始することになるのであるが、その経緯を自伝の中で次のように記している⁽⁹⁾。

当時東京の書店から出版の申込みが多く、殊に教育研究会は前からの縁故もあり、執筆中であった「理論的教育学」をと迫られた。私は容易に承諾しなかった。前にも言った通り、なるべく閑寂な生活に入り、経済的にもあまり配慮しないようにありたい。それには「学位」を得ておくのが良かろう、学位なくとも世間は適当に評価してくれるなどとうぬぼれてはならぬ。かように考えて、四月のある日、散歩の途上から引き返し、すぐその夜から、学位論文の筆をとった。そしてもし学位論文が通過するようであったら、その時「理論的教育学」も一所にしてと、教育研究会に申入れた。異議のありようはなく、両者をほとんど同時に世に送ることにきめ、私は毎日学位論文の稿をつづけ、一応まとまったのは、忘れもせぬ十月末、もう仙台には雪がちらつき、夜中の蕎麦売の笛が待たるる頃であった。論文の題は「教育の本質と教育学」。それ迄教育学の学位請求論文は多くは教育史（本邦又は西洋の）であったから、一つ、変わったところをとの野心も幾分加わっていたのである。

篠原は、通俗レベルでの満足よりも個人的な動機を優先し、また学界のトレンドとなることを意識的に避けて、ほぼ半年間、自分の研究の構築に没頭している。このような、碩学と評価される人物には遠く及ばないにせよ、3人には、誠実で、ひたむきな、最大限の頑張りを期待したい。

（助川晃洋）

〈注〉

(1) https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2018/_icsFiles/afieldfile/2019/01/16/datah30z1.pdf (2019年7月12日接続確認)

(2) 竹口智之・山本晃彦・末吉朋美「社会文脈的視点を取り入れた研究計画書執筆過程—X大学Yセンターの留学生を対象に—」『関西大学高等教育研究』第10号、関西大学教育開発支援センター、2019年3月、p.99.

(3) 細川英雄『研究計画書デザイン 大学院入試から修士論文完成まで（増補改訂版）』東

京図書、2015年

- (4) かつて助川は、小中一貫教育について、「『中1ギャップ』と称される段差の解消に資することが期待される生徒指導上の方策の一つとみなされるべき」であると述べた。この見解は、大筋で幼小連携についても当てはまる。
- 河原国男・中山迅・助川晃洋編著『小中一貫・連携教育の実践的研究－これからの義務教育の創造を求めて－』東洋館出版社、2014年、p.39.
- (5) 大学院生が各自で準備した草稿を助川が集約し、原文をできる限り尊重しながら、大小様々な加除修正を施し、それなりに体裁を整えて、決定稿に仕上げた。
- (6) 三木清『読書と人生』講談社、2013年、p.113.
- (7) 宮崎七湖『人文系大学院留学生の文章課題遂行過程における管理プロセス』早稲田大学出版部、2012年
- (8) 潮木守一『フンボルト理念の終焉？ 現代大学の新たな次元』東信堂、2008年、pp.247-249.
- (9) 篠原助市『教育生活五十年』大空社、1987年、pp.321-322.

(2019年9月12日脱稿、10月1日投稿・受理)

〔研究紹介〕

フィジーカーに対する筋電図を用いた
肩のトレーニングの研究

教育学専攻

修士課程1年 酒井勇輝

一般的にトレーニング上級者とされているフィジーク競技出場者の肩のトレーニングは、実際のフィジーク競技者の主観と一致しているのか、ということについて筋電図を用いて研究を行っている。フィジーク競技の大会において上位に入賞するためには、いわゆる逆三角形の体が審査員の評価を得るうえで重要になってくる。すなわち、三角筋や広背筋といった、体を正面から見た時に体が逆三角形に見えやすい筋肉が発達している選手のほうが大会で好成績を残せる傾向にある。そのため、フィジーク競技者は三角筋を鍛えるトレーニングを重要視している。

一般的なトレーニング指導が書かれている書籍では三角筋を鍛える種目はショルダープレスやラテラルレイズなどが挙げられている。プレス系種目間の三角筋の筋活動を計測した研究では三角筋前部はナローベンチプレスやワイドベンチプレスと比べてバックプレスやフロントプレスのほうが筋活動が高い値を示した。三角筋中部では他の三種目と比べてバックプレスとフロントプレスのほうが筋活動が高い値を示した。しかし、三角筋後部のプレス系種目間では差はないということが示された⁽¹⁾。

この研究から三角筋を鍛える種目において効果的な種目は具体的に明らかにされているが、フィジーク競技者を対象とした研究はない。一般人と比較して、フィジーク競技者はトレーニングに対するアイソレーションの技術が高いため、先行研究とは異なる結果が導かれる可能性が考えられる。そこでフィジーク競技者に対する三角筋の筋活動を計測し、一般人と比較し、検討する。

現在の研究進捗状況としては、フィジーク競技や筋電図に関する文献を様々な角度から捉え、レビューしながら予備実験を行い本実験に備えている。

〈参考文献〉

- (1) 半田徹「筋電図学的分析による筋力トレーニングのプレス系5種目における三角筋・上腕三頭筋の活動の違い」『ヒューマンサイエンスリサーチ』VOL.11 pp.125-135 2002.

〔研究紹介〕

道徳教育における公德心の在り方に関する一考察

—望ましい道徳教育の授業実践へ向けて—

教育学専攻

修士課程1年 張 昕 怡

国際的に見ると日本人は公德心が高いと言われている。ではなぜ日本人の公德心が高いのだろうか。私は、それには日本の学校における道徳教育が影響しているものと考え。そこで、修士課程において、日本の道徳教育の効果的な内容や指導方法について考えたい。具体的には中学生を対象とした公德心の在り方に関する道徳教育を中心に考察する。その際、中学生と教師との関係や思春期にある生徒たちにも焦点を当てながら考察を深めたい。将来は中国で教壇に立つことを希望しており、現代における日本の公德心の育成について研究し、中国における教育実践にも生かしたいと考えている。

研究内容としては、大きく二つの柱を考えている。

一つは日本の教育の捉え方に着目して、日本における戦後から今までの社会や時代の変化に着目しながら、道徳教育の中で公德心がどのように捉えられてきたのかについて調べる。まずは、戦後における時代や社会の移り変わりを確認したい。中学生が生きる時代や社会の特徴を知ること、公德心をはじめとする道徳教育の在り方を確認したいと思う。そして、時代や社会を背景に、およそ十年ごとに改定されてきた学習指導要領における道徳教育について、とくにそのなかで、公德心についての内容にはどのような変化があったか、研究する。

いま一つは「公德心についての授業実践」を考えてみたい。まずは、中学校の生徒にかかわる人間関係や環境の変化を調べる。その中から今の中学生の特徴や在り方、親や学校との関係などに着目しながら、公德心を中心に、道徳教育における望ましい指導方法を考えたい。現代の環境における中学生に対する公德心の教え方を知り、今の中学生の状態を理解するために、機会があれば日本の中学校における道徳教育の授業実践も見学したい。教科化された日本の道徳教育において、教員は今後、検定教科書を使用することになるので、その内容や関連する道徳なども分析したい。理論と実践を結合し、考察を深めていきたい。

研究方法としては、文献研究を中心にしながら、できれば実際の教育実践も見

ていきたい。文献研究においては、日本の道徳教育にかんする学習指導要領をはじめとして、そこでの公德心やそれに関わる道徳教育の考え方に関する論文や研究報告などを基に考察を進めたい。教育実践については日本の中学校を訪問し、道徳の授業を観察し、生徒を含む学校関係者へのインタビュー調査を実施するなどして、望ましい教育実践を考える手がかりとしたい。

〈参考文献〉

- ・会田優子 内海雅之 小森喜代美 土田礼之 上原秀一「道徳読み物資料と「公共の精神」」『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』第1号 2015年
- ・石橋茉奈 石田弓「中学生の養育者への信頼感と攻撃性の関連」『広島大学心理学研究』13 2013年
- ・稲永祐介「大正青年団における公德心の修養：一木喜徳郎の自治構想を中心に」『慶應義塾福澤研究センター近代日本研究』No.22 2005年
- ・加藤弘通 太田正義 松下真実子 三井由里「思春期における思考の発達と自己および人間関係への影響：批判的思考態度について縦断調査をもとに」『子供発達臨床研』5 2014年
- ・片山清一『戦後道徳教育外史』高陵書店 昭和63年
- ・秦政春「子供たちの規範意識と非行・問題行動」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』26 2000年
- ・藤原政雄『新時代公共心・公德心の育成』明治図書出版 1971年
- ・山岸賢一郎「「公德心のない人」の表象をめぐる一考察—道徳教育が道徳的なものであるために—」『長崎大学教育学部紀要』3 2017年
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 道徳編』平成20年
- ・文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編』平成29年

〔研究紹介〕

高等学校公民科における アクティブラーニングの在り方について

教育学専攻
修士課程1年 谷合毅

私は、「高等学校公民科におけるアクティブラーニングの在り方について」研究をしている。元は高等教育の場で述べられていたアクティブラーニングというものが、今では中等教育の場においても盛んに述べられている。アクティブラーニングという言葉が平成26年の文部科学大臣諮問で述べられ、平成29・30年改訂の学習指導要領解説に「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善(アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善)」という形で記載されて以来その勢いは増している。しかし、アクティブラーニングを中等教育に持ち込んだ文部科学省は、学習指導要領及び学習指導要領解説、その他答申を含め、アクティブラーニングの定義や具体的な中身を明示していない。では、そもそもアクティブラーニングとは何なのか。私の専門である高校公民におけるアクティブラーニングとはどのようなものであるべきなのか。私自身が現場の教師を志す身として、この問いを明らかにしておきたいという思いからこの研究を始めた。

そこで、私はアクティブラーニングがどのような経緯から中等教育の場に登場したのかを調査した。教育再生実行本部、教育再生実行会議、中央教育審議会、それらの各分科会・部会、文部科学省の答申からアクティブラーニングや学習指導要領改訂に関するものを端から当たり、同時に高等教育におけるアクティブラーニングの遍歴についても学んだ。また、アクティブラーニングに関する解説書や中等教育での実践報告も調査した。そこから見えてきた一つの結論は、アクティブラーニングとは授業の一手段であり、決して目的とはなり得ないということである。アクティブラーニングを実践する意義は授業目的であり、単元目標であり、延いては社会科教育の目標である。それらを踏まえ、アクティブラーニング及び高校公民におけるアクティブラーニングの在り方を私なりに定義することを理論部分に、それをもとにした実践を構築することを実践部分として、修士論文を作成したい。